

Title	円谷弘著 我国資本家諸階級の発達と資本主義的精神
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.6 (1920. 6) ,p.869(131)- 871(133)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19200600-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

語になつゝ、また忠實な逐語譯のやうである。次に私の氣附いたことを書きたいと思ふ。私の讀んだ部分は谷島學士の邦譯された部分である。

一、譯語が一定してゐないことがある。例へば「Collective bargaining」を「衆團的交渉」(本書三六頁)または「團體的交渉」(六二頁)の如き、「Function」(Functional)を「職分、職分的」または「機能、機能的」の如き、「Pay」を「給金」または「俸給」としたのは何れかに統一して頂く方が讀者の爲めに便利である。

二、「Greater Unionism」を「大なるユニヲニズム」(六四頁)と書くよりも「大労働組合主義」と書く方が普通であると信ずる。序でにクラフト・ユニヲニズム Craft Unionism インダストリアル・ユニヲニズム Industrial Unionism をそのまゝ書かれた所と「職業別」「産業別」と書かれた所がある。これも統一する方が便利である。

社會主義に關する紹介を讀む暇があるならば何人もギルド思想の源泉とも云ふべき本書を廻避することは出来ぬ筈である。

私は是等の理由からこの翻譯の出現を喜び重ねてギルド社會主義の研究者の必讀の書として之を推したいと思ふ。終に私は譯者黒田、谷島の兩學士の勞を多とするものである。

(加田忠臣)

圓谷弘著

「我國資本家階級の發達と資本主義的精神」

三田書房發行

四六版二〇六頁定價金二圓

曰くマルクス、曰くクロポトキン、曰くラツセル、曰く何、曰く何。今や我國思想界は所謂「ランプレヒトの變轉期」に際會して、船載され

第十四卷 (八六九) 新刊紹介

三、「Commercialism」を「實利主義」(六七頁)と譯されたがこれは「Utilitarianism」または「Pragmatism」の譯語と混同される恐れがあるから別の譯語にする方がよいと思ふ。「Distribution」を分配主義(一三〇頁)とするよりも分産主義の方が普通のやうに思ふ。

私が氣附いた點はざつとこんなものである。それは勿論如何なる譯書にも不可避的なものである。社會思想に關する英書とさへ云へば、直ちに翻譯され、然も暴譯、誤譯に充つる書籍の發行が非常に流行するときはこの譯者の如き用意を以つて譯筆を振はれたのは私の感謝する所である。

それから私がこの譯書を推す第二の理由はこの書そのものが前にも述べた通り、ギルド社會主義の理論を知るに適してゐることである。簡單な然も不十分な材料によつて書かれたギルド

たる種々なる學說に惑亂されたやうな恰好である。我國社會學の權威米田博士は曰く、「併し夫れは(労働運動)諸國に通じて全然同一なる形態に於て行はれて居るのでなく、各國特有の諸般の社會的事情或は條件に應じて、夫れ夫れ特有の形態に於て行はれて居るのである。されば我國の労働者間に於て、堅實に發達す可き社會思想及び社會運動も、…他方に於て我國特有の社會的事情或は條件に應じて特有の形態をとる可きものである。」(同氏「最近社會思想の研究」中卷前篇序文)と。實に我國には我國獨特の文化の存すること、敢て特殊事情の宣傳に汲々たる所謂識者の努力を待つ迄もない。米田博士の高弟である長友圓谷弘君こゝに「我國特種文化を究明しない傾きの少くない。」(本書序文)ことを慨して、「此の欠陥を満す可く、本書二卷を公にされた。氏は先に史學を攻究し、更に社會學を極

め、殊に我國に於ける資本主義の起源及び其の發達に關しては多年研鑽せられたる篤學の士である。先づ其の第一編に於いて我國の資本主義的精神を促進せしめし由來を論じ、筆を幕府の崩解に起し、實學の尊重、自由思想、功利主義等の外國思想の影響を明かにし、吾人をして維新當時の所謂文明開化的状態を彷彿させる。次いで第三編に於いて斯の如き資本家階級の發達に就いて各方面より論及し、最後に現在如何に資本家階級が絶大な勢力を有するかを述べて其の第三編を終結して居る。

著者は我國資本家階級と稱する者は「修養ある士族の産業化並に知識階級の産業化により、全く舊町人とは異なる新資本家階級」であるとなして居る。(同書二九頁)素よりかゝる階級の發達せし所以は江戸時代に現れたる町人精神の内に資本主義の萌芽を有して居るからであつ

る。然し乍ら斯の如き著述の全然欠如して居る今日巧みに材料を取捨し、明確に我國資本家の發達を記述したる點に於て苟も現代社會問題に興味を有する者は一讀の必要があると信ずる。更に本書の後半に附せられてある「町人階級の勃興と町人精神」の一篇は前者を補足し且つ著者の歴史的洞察力を語る有益なる論文である。最後に著者自らが後日に保留せられたる所であるが、斯の如き學界に寄與する所少からざる研究の完成を一日も早く成就せられんことを希望して敢て妄評の筆を擱く。

(野村兼太郎)

松本芳夫著 神代史研究

神代史は今尙ほ國史研究上の處女地である而して斯くの如き未墾地の開拓に向つて著者の如き眞摯の學風を代表する人を得たことは吾等の

て、かゝる發達の萌芽を有し且つ資本主義に順應するの能力を有したる當時の智識階級即ち士族の産業化によりて資本主義的産業の發展を見るに至つたと斷定して、(同書六二頁)こゝに我國資本主義的制度の起源に就いて新解釋を齎さんとされて居る。然も尙ほ其の資本主義的勢力の絶大なるは、穩健なる著者をして現代原内閣を自して「平民内閣と云ふも之れ鬼面人を欺くの類にして政權は全く貴族階級より資本家階級へと移り來たるなり。」(同書一二七頁)の言をなさしめて居る。かくて明治維新より現代に至る迄の資本家階級の發達を解剖せる著者は現代の資本家を以つて、武士——士族——官僚を経て完成せるものであるとなし、町人階級は其の支配階級たる機會を失したと結論して居るけれども、(同書一二八頁)是等は少しく外形を重んじて内容を輕視した論法ではあるまいかと思はれ

第一に感謝しなくてはならぬことである。

而して著者の眼に映じた歴史は未完成なる人類生活實現の記録であつて、此記録に對する著者の態度を氏の言を借りて云へば「自己の醜惡を曝露し、現實そのまゝのわれの姿を認めんとする」とは實に困難なる、そして非常な誠實と勇氣とを要し、或る場合には悲しくもあるが、しかしあくまで尊い態度である、斯くの如き謙遜なる態度は單に宗教の場合に於いてのみならず、あらゆる場合に於いて尊いのである、國家史研究に際しても、一切の豫謀的意圖を放棄して、國家全般の姿をそのまゝに認めんとする態度に立たねばならぬ、そのまゝとは故意の改竄や隱蔽や曲解をしないこと、即ち一切の政略を廢することである、かくして始めて國家本然の姿が得らるゝのであるが、しかしそれが偉大、弱小、善美、醜惡何れの姿なるかは、吾々の第一